

KEIWA COLLEGE REPORT

第50号

April 2007

敬和カレッジ・レポート

発行/敬和学園大学後援会
敬和学園大学広報委員会

KEIWA COLLEGE REPORT

April 2007



学長との旅立ちの握手

創刊50号記念

創刊50号記念対談 「第50号、そして100号にむけて」

創刊50号に寄せて/カレッジ・レポートの歴史

学長との旅立ちの握手「第13回卒業式・卒業謝恩会」

夢の実現にむけて「教職課程・社会福祉士養成課程・合同企業説明会」

人気授業「経済学」、お餅で国際交流「留学生交流会」

退職された教員からのメッセージ、春からはじめる生涯学習

2007

発行所/敬和学園大学 〒957-8585 新潟県 新潟市 富塚1-7-0 番地 TEL:0254-26-3636
印刷所/オウゴン印刷所 〒950-0963 中央区南出来島1丁目19番地1号 TEL:025-283-2151

KEIWA チャレンジ学生ファイル⑰



国際文化学科2年

堀 聡 美

「共感してもらおう喜び」

私が初めて短歌をつくったのは、中学1年生の5月でした。みんなで「さらさら短歌」に応募するため、国語の時間に先生から配られた用紙に適当に書きました。当時、毎年5月のこの1時間が大嫌いでした。

そんな私が短歌を好きになったのは、高校に入学して最初の芸術（書道）の時間につくった短歌を、先生に褒めてもらったことがきっかけでした。その年の9月には、「新潟県民短歌大会」高校生の部で、原田清先生選・佳作を受賞しました。このころから応募している「にいがた市民文学」短歌部門でも4年連続入選しています。

『空と雲 ジーパンとシャツ 青と白 私の好きな さわやかな君』
(新潟日報2007年1月29日朝刊 日報読者文芸 短歌 馬場あき子先生選)

上記の短歌が「新潟日報」に掲載されるとは思ってもみませんでした。そもそも応募した理由は、文学の若月忠信先生から勧められたからです。高校生の時は先生に「自己満足で終えるな」「共感できない」等の指摘を受けることの多かった私が、大学に入学して、共感してもらえるような短歌をつくれるようになりました。

私の短歌の殆どが実体験です。そのせいか、ふとした時に思い出しながらつくっています。もちろん、スランプに陥る時期もあります。その時の気持ちをきちんと思い出せずに、悪戦苦闘しながらつくっているからかもしれません。また短歌が似たり寄ったりしていることもスランプの原因の1つです。自分のことばを増やし、人に共感してもらいつつ、感動してもらえるような短歌をつくっていくことが今の私の目標です。



敬和学園大学の最新情報

キャンパス日誌

検索

www.keiwa-c.ac.jp/nisshi/



ケータイ付

カレッジ・レポート創刊五十号 記念対談
第五十号、そのついでに



新井明学長と宇田川潔事務局長（大会議室にて）

カレッジ・レポート創刊号の表紙を飾った絵画は、故田中忠雄画伯による「十字架を背負うイエスを見て恐れ惑う弟子たち」です。この絵画は、敬和学園大学が開学したときに、田中画伯より記念にいただいたもので、今も敬和学園大学の大会議室に飾られています。

本学の教授会は毎回、大会議室で行われており、大学のさまざまな重要事項を審議しています。この絵画は、罪とがの無いイエスが、十字架を背負いよろよろと歩く姿を、見ていた弟子の誰一人としてその十字架を代わって背負うことなく、恐れ惑う姿を描いています。このあと、イエスはこの十字架の上で息絶えました。

この絵画は、私たち一人ひとりにこのことを問いかけ、今も敬和学園大学の教授会を見守り続けています。

（企画・広報係）

もくじ

CLOSE UP 「創刊50号記念対談」	11	日本海カップ綱引選手権大会のご報告	11
創刊50号に寄せて	4	退職された教員からのメッセージ	12
カレッジ・レポートの歴史	4	大学の植栽について	14
第13回卒業式と卒業謝恩会のご報告	6	新発田学研究センター開所記念講演会のご報告	14
卒業生からのメッセージ	7	2007年度オープン・カレッジのご案内	15
教職課程 教員採用にむけて	8	2007年度科目等履修生・研究生のご案内	15
学内合同企業説明会のご報告	8	同窓会リレー・エッセイ 坂爪直樹	16
社会福祉士国家試験合格にむけて	9	寄付者ご芳名	16
人気授業「経済学」	10	学事予告	16
韓国語スピーチ大会のご報告	10	キャンパス日誌	17
留学生交流 餅つき大会のご報告	11		

<表紙写真> 「学長との旅立ちの握手」
今年もたくさんの学生が社会へ巣立っていきました (p.6)



カレッジ・レポート第五十号の発行を記念し、これまでの歴史を振り返ってみようとして座談会を企画しました。歴代の広報委員長で現職の先生方（松崎、桑原、松本）にお集まりいただき、そこに担当職員（小端）も同席させていただきました。

●年四回の発行ができるまで

松崎 カレッジ・レポートが現在の体裁になったのは、開学三年目の一九九三年の四月号からです。しかし、この頃はまだ、発行は不定期でした。現在の年四回発行の体制が整ったのは、桑原先生の時からです。

桑原 私が一九九八年に広報委員になった時は、北垣初代学長が委員長を兼務されていましたが、その後、私が委員長になりました。四回定期的に出したいという前学長の希望

をお聞きしていただきましたので、その実行を第一の仕事と心得ました。

実行にあたってのポイントは二つで、一つは、発行日を決め、逆算して、原稿締切日や校正期日などを決めたことです。それに従って毎号行程表をつくり、そのとおりに作業をすすめるようにしました。

もう一つの工夫というのは、記事の内容をできるだけ固定化するという事です。以前は記事内容を毎回、一から考えていたのですが、そんなことをしていたら編集作業が大変になります。大学の一年間の行事は大体決まっていますので、四号分の枠組みをあらかじめ決めたのです。「クローズ・アップ」を巻頭にもつてくることやページ割りも含めて、四月、七月、十月、一月にそれぞれどういう行事があるのか、どういう記事を入れるべきか決めました。ただし、それは動かせないものではなくて、よいアイデアや特別な行事があるときには、記事の入れ替えもできるようにしました。

「クローズ・アップ」も毎号誰に頼むのかを悩んでいましたが、四月号は必ず学長、その他の号についても教員の執筆願を決めておきました。例えば学科は交互に、その中でも年齢順にという具合に。

松崎 几帳面な桑原先生の性格がよく出ていますね。そのパターンは今も踏襲していますので、そういう枠組みをつくってくださったことで、後の方にとってはやりやす

い面があったでしょうね。

桑原 実際、定期的に発行するようになり、北垣前学長が「ちゃんと四回出せるのですね」と、喜ばれていたことを覚えています。

松崎 それは今でもおっしゃっています。北垣先生の悲願でしたから。

●新しい試みにチャレンジ

松本 私は一九九八年に赴任して、すぐに広報委員会に配属になりました。やはり北垣先生が委員長の時です。桑原先生が作成された行程表は、私の時代もとても有効に利用させていただきました。

私の試みの中で、何か新しいものがあつたとするならば、例えば、先生方が本を出された時の著書紹介です。それと学生に描いてもらった四コマ漫画。漫画でちょっと息抜きができるとういと思いました。

そのころの記事構成で反省したことは、先生方の顔しか見えないということでした。また、イベントはこんなことをやって何人集まって、成功裏に終わりましたというような報告が多く、学生の声をすくい上げることが少なかったということです。そういう反省の中ではじめたのが、この学生による漫画企画だったのです。

それから毎回ではなかったですが、カラーのページを入れてみました。費用のことなど問題もありましたが、とにかくやってみたことが、今のカラフルな紙面につながったという感じがします。

それと、創刊号から表紙に使っていただいて田中忠雄先生の絵画を全部使った後、今度は風景画を掲載しはじめましたね。

松崎 この風景画は退職された安藤司文教授のお父様の安藤唯一博士がお描きになった絵画です。開学時に寄贈いただき、学長室に飾ってあった作品をはじめ、本学の図書館の蔵書にもある画集から安藤先生に許可をいただいで掲載させていただきましたと聞いています。

松本 そうでした。その画集をほぼ全部掲載し終わって、学生の表情がもつと見えたほうがよいということ、三十三号から現在のように写真を表紙にしたわけですね。

●学生の顔が見える広報誌へ

松崎 私は松本先生の後に委員長に就任した時、カレッジ・レポートは後援会の援助で発行しているということをお聞きし、そのことを大切にしなければならぬと考えました。後援会は学生の保護者で構成されていますので、とにかく焦点を学生にシフトすることを目指しました。そして、この流れの中で、「クロース・アップ」に卒業生を取り上げてみようと考えました。

松本 私のころに「卒業生は今」という企画がありました。いつも誰かいないかと相談していた記憶があります。

松崎 創立から年数を経て、卒業生が活躍するようになったということでしょう。年数を重ねてきたことは、とても大きなことです。菅野さん(三十六号)や皆川さん(四十号)のように「クロース・アップ」で紹介できるよう



松崎洋子先生

だからこの「チャレンジ学生ファイル」に登場する学生を選ぶことに関しては、苦労したことは一度もありませんでした。

また、今年からは、現広報委員の発案で、執筆者が次々と指名していく、卒業生の「リレー・エッセイ」を始めました。

桑原 大学も年を重ねてきましたので、卒業生にも自然な形で大学に目を向けてもらうことは大切なことだと思います。

松崎 第九号から寄付者名を記載していますが、最近では、卒業生のお名前が多くなってきました。ありがたいことです。

●そして、これから

松崎 さて、大海先生からは早くも百号を目指してお励みくださいという一文を寄せていただいたのですが、五十号を記念して、お二人の先生にこれからのカレッジ・レポートのあり方などについて、おうかがいしたいのです。

桑原 他大学の広報誌と比べて見ると、本学のカレッジ・レポートの内容は面白いと思います。他大学は報道型が一般的ですが、カラー・ページがあるということだけではなく、内容もカラフルだと思います。つまり、「クロース・アップ」や、学生を中心にした個人的な記事が多いからだと思います。この点は魅力的だと思うので、今後とも継続して欲しいと思います。

松本 今までの路線を踏襲して、なおかつ拡大していけばよいと思います。例えば表紙であれば、部活の写真や授業風景などを、学生の表情をより鮮明に打ち出していくのがよいと思います。それから、「クロース・アップ」が面白くなりました。前回の金山

な活動をしている卒業生が出てきたことは、すばらしいことです。

桑原 保護者懇談会でもカレッジ・レポートを読んで、こんな卒業生がいるのですねと言われることがあります。菅野さんの記事は大きいし、きちんと書かれていますから、保護者の方たちも「こうやって育っている人もいるのだなあ」とわかってもらえると思います。「卒業生は今」は一段で小さな記事ですが、重要だと思えます。

松崎 保護者の方のほかに、結構カレッジ・レポートについての反応があります。**小端** 毎回発行後に、官製はがきやメールで、お礼や感想をいただいています。そして、ご寄付までいただくこともあります。

松崎 ありがたいことです。大学が開学するまでに、一般の方々からなんと三億九千万円の寄付をいただいているのだそうです。その方々に大学の設立準備・設立申請の状況をお知らせするために、カレッジ・レポートの前身の広報誌を発行しはじめました。カレッジ・レポートの送り先には、もちろん後援会員や学園関係者もありますが、今でもそのときご寄付いただいた方々にお送りしています。ある意味で、私たちよりも長い歴史があるのです。そういう方々からも感想をいただいているのかもしれないね。

桑原 発行部数もずいぶん変わったと思います。オープン・カレッジに参加いただいた方にも送るようになりましたね。

小端 私が担当をはじめたころで、すでに四、〇〇〇部程度を発行していました。それまでは、すべて総務課の職員が手作業で

先生の記事は面白かったです。報告記事は少な目に、このような読み応えのある特集記事をもう一本くらい連載してみるのはどうでしょうか。



松本ますみ先生

松崎 教員も「クロース・アップ」を読者の目線で書いてくださるようになったと思うので、読みやすく、評判もよいようです。

松本 今思い出したのですが、つい先日偶然、退職された伊藤豊治先生にお会いしました。開口一番「この前のクロース・アップは面白かった」というお話をされていました。退職されて何年も経っている先生方と敬和をつないでくれているのがこの広報誌なのだつくづく思いました。

松崎 退職したら私にも送ってくださいね。

松本 読者層がどんどん拡大しているということも念頭に置いて、編集方針も決める必要があるのでしょうか。

松崎 委員長をされた先生方の時期と今との一番の違いは、現在のような広報の専従スタッフがいなかったことでしょうか。

松本 私が委員長を辞める時に、広報委員会から、広報係の必要性を訴える書類を提出したのです。それをおそらく聞き入れてくれたのでしょう。

松崎 それまでなかった「企画・広報係」ができ、小端さんがその仕事を担うことになったわけですが、いろいろ苦労があったのではないですか。さまざまなアイデアを提供してくださいましたよね。

発送作業をしていたそうです。

桑原 覚えていますよ。紙折り機を購入しましたね。**松崎** 編集作業の他にそういう苦労もあったのですね。総務課は。



桑原ヒサ子先生

小端 そうなのです。幸い私が担当した時は、既に発送作業を業者に委託していて、そういう苦労はありませんでした。今では、発行部数は九、五〇〇部にまでなりました。

桑原 短期間でとても部数が増えたのですね。これは大変な広報効果があります。

松崎 とところで、カレッジ・レポートは在学生にも読んで欲しいのですが、その点はいかがですか。

小端 学生をよく取り上げるようになってから、「友達が載っているから何部かください」といつて来る学生ができました。また、ある先生から聞いた話ですが、「あの学生もこの学生も載っているのだから、次は自分の番かなあ」と期待している学生もいたそうです。みんな関心を持って読んでくれていると思います。

松崎 三十二号から裏表紙に「チャレンジ学生ファイル」欄をつくりました。それでまた学生が関心を持ってくれるようになりました。この時、学生係を含めて事務局の人たちがなんて学生のことをよく知っているのだろうと驚きました。特別な活動をしている学生とか、賞をもらった学生とか。

小端 カレッジ・レポートは、これまで担当していた藤井さんから引き継いで、三十一号の途中から担当しました。

桑原 そうすると「チャレンジ学生ファイル」は最初から関わられたのですね。

小端 そうなります。校正作業も最初は赤ペンでの手作業がとても多かったです。手書きの原稿をコンピュータに打ち込む作業も当初は多くありました。

ご存じない方もいらっしゃるかもしれませんが、北垣前学長は、毎回カレッジ・レポートを送付する際に、卒業生にお手紙を書かれて同封していました。今、新井学長になっても、それは続いています。

松崎 ここまで続けてこられて、五十号というところ、感慨深いものがありますね。それは、私だけでなく、敬和に関わる全ての人にとって、そうなのではないでしょうか。

そして、これからもカレッジ・レポートが大学と大学に関係する全ての人々を結び、刺激的なコミュニケーション誌であり続けるよう努めてまいります。



「意見・ご感想お待ちしております」

敬和学園大学総務課企画・広報係

新発田市富塚 一七〇 (957-8586)

Tel. 〇二五四一二六一三六二五

Fax. 〇二五四一二六一三六四六

e-mail kcop@keiwa-c.ac.jp

学園の成長とよび



敬和学園大学長
新井 明

『敬和カレッジ・レポート』が第五十号をむかえます。広報委員会に連なる教職員の方のご努力に対して、まず心からのお礼を申し上げます。

私は敬和学園大学には、その設立以前から、ある関わりをもっていました。特に親友の北垣宗治初代学長が創設後の学園の様子を、ときおり知らせてくださいましたので、なんとなく学園の成長の跡はわかっているような気になっていました。しかし着任後、学園の実際にもふれてみまして、承知していない事柄が多々あることがわかりました。そういう折に、学園の過去を確認するに最も大きな助けとなりましたのは、この『カレッジ・レポート』でした。

入学式、卒業式の様子、そこに現われる教育理念、先生がたの紹介、学校行事、学生諸君の各種の活動、就職事情、かつまた各年度の資金・消費収支の公開などなどのページも有意義で、しかも楽しい写真を満載しています。

創設十五周年を迎えるにあたりまして、企画・広報係を中心にして、『写真でつづる敬和学園大学十五年のあゆみ』（二〇〇五年）を作ってもらいましたのは、この『カレッジ・レポート』製作の経験と実力はそれを生み出す実力をもつ、と見たからです。この冊子をいちばん喜んでくださったのは、おそらく北垣先生でありました。

創刊50号に寄せて

カレッジ・レポートの歴史

創刊は、敬和学園大学の創立から二年遅れた一九九三年四月になります。それまで、カレッジ・レポートの前身として、「敬和学園大学準備室ニュース」、「敬和学園大学後援会だより」が発行されていました。

冊子のサイズやページ数、そして各ページが三段で生まれ、クローズ・アップで始まり、キャンパス日誌で終わるというスタイルは、この創刊号から、今も変わらず継続されています。

その後、不定期の発行が続きましたが、第十四号より年四回の定期発行となりました。現在、カレッジ・レポートは、全ページカラーで構成されていますが、このようになったのは、裏表紙のチャレンジ学生ファイルがはじまったのと同じく、第三十二号からです。また、第四十六号からは敬和学園大学ホームページ（www.keiwa-c.ac.jp）でも閲覧できるようになっています。

この五十号の発行部数は、一〇、〇〇〇冊で、読者への送付のほか、地域の公共施設等に設置していただいています。もちろん、すべてのバックナンバーは、本学の図書館で閲覧することができます。

カレッジ・レポートの印刷、発送等の費用は、すべて後援会からご負担いただいています。常にいきいきとした学園生活をお伝えできるように編集を心がけています。本誌は送料を含めて無料です。お気軽に本学までご連絡ください。（企画・広報係）

創刊50号に寄せて

思い出したいエピソード



敬和学園大学前学長
北垣 宗治

『敬和カレッジ・レポート』が五十号になると聞いて、思い出すことがある。紙面のフォーマットは私の前任校、同志社大学の広報誌を参考にした。つまり、二つに折るとちょうど定形の郵便物になる大きさである。表紙には田中忠雄先生の絵を使わせていただいた。田中先生は聖書を主題とする絵をたくさん描いてこられ、敬和学園大学でも講演してくださったことがある。第一号に使った先生の絵の原画は、聖籠館の大会議室に今もかかわれている。

はじめのころ、私が広報委員長を兼ねていたと記憶するが、スケジュールどおりに発行できず、だからと不定期に発行していた。それを年四回と決め、しっかりと年次計画を立て、原稿の締切りを厳守させ、ゆるぎない制度を確立された功績は、広報委員長としての桑原ヒサ子先生に帰する。四月発行の号には、学長が巻頭のエッセイを書くという慣習も桑原先生がつけられた。大学後援会が印刷費を負担してくださる制度も感謝すべきことである。

敬和学園大学のことを英語で「ケイワ・ユニヴァーシティ」と呼ぶ人もあったけれど、私は断固として「ケイワ・カレッジ」を主張し、それに固執してきた。敬和学園大学がバララルアーツを標榜する限り、「カレッジ」こそがふさわしいと私は確信している。

創刊号に思い出す「敬和の記憶」



前 国際文化学科 教授
大海 宏

記念すべき五十号を心からお祝い申し上げます。敬和学園大学を五年前に退職した私にとりましても格別の感慨があります。

本誌創刊号で、現在でも毎号その巻頭を飾っているエッセー「CLOSE UP」の第一号を書いたのがこの私でした。四十年近く銀行実務を経験してから、本学の教授に転身した私が選んだ主題は、「カルチャーギャップ」でした。市場と競争が支配する世界と、同僚を先生と呼び自分のオフィスを「研究室」と称する社会とのギャップを埋めるにはずいぶん時間がかかりました。学生諸君には、東京と新潟、更には日本と外国とのギャップまでを論じ、異文化コミュニケーションを有効に遂行できる国際人を目指せ、とはっぱをかけてきました。

私はまた、創立早々の敬和学園大学の知名度を高めることに注力しました。具体的には「新潟日報」に数多く登場すること。私のゼミの活動で、日本最初の大学内「投資クラブ」や「東京ゼミ合宿」、「ディベ

ート」などは繰り返し取り上げてもらいました。当初東京で取材していただいた記者は、現在の新潟市長篠田昭さんその人でした。日報に掲載された記事は、三十四にも上ります。思い出は尽きません。本当に私の人生で最も充実した楽しい十年間でした。次は、第百号を目指して、更なるご発展をお祈りいたします。

母校へのお手紙



オリオン印刷株式会社
栗原 信介

『敬和カレッジ・レポート』創刊五十号の発行、おめでとうございます。

敬和学園大学の卒業生（二期生）として、毎号楽しく拝読させていただいています。そして同時に、オリオン印刷の敬和学園大学担当営業として、『敬和カレッジ・レポート』の編集、制作のお手伝いもさせていただいています。

卒業生にとっては、忙しい毎日で母校を訪れる機会もあまりないでしょうから、この『敬和カレッジ・レポート』が、卒業後の母校の様子を知ることのできる一番の媒体ではないかと思えます。

在学中は、正直なところあまり目にとめることがなかったのですが、卒業して十三年がたった今、部活や敬和祭での後輩たちの活躍ぶりなど、さまざまな情報が盛りだくさんにつまった『敬和カレッジ・レポート』を読みながら、私が学生だったころはこうだったと思ひ出したり、私が在学していたころにはなかった学科や新設された施設などを見て、在学中の学生は充実した環境で学べているのだとすらやましく思っています。そして、後輩学生のがんばっている姿に刺激を受けています。

これからも、卒業生として『敬和カレッジ・レポート』の発行を楽しみにしています。そして、よりよい紙面となるようお手伝いさせていただきますと思います。



創刊号から第49号まで

学長と交わした旅立ちの握手 — 第十三回卒業式と卒業謝恩会のご報告 —

第十三回卒業式が、去る三月二十日に聖籠町民会館で行われ、百三十三名が希望に胸を膨らませて社会へ巣立ちました。前奏が鳴り響いた後、厳粛な趣の中で卒業式が始まりました。延原宗教部長による聖書朗読と祈祷の後、新井学長から卒業生一人ひとりに「卒業証書・学位記」が手渡され、すべての卒業生と握手が交わされました。続いて、学長から卒業生諸君に対し、「きみたちが入学記念に植えてくれたユリノキは、だいぶ育った。木は育つ。きみたちも木が育つように、育っていつてください。」との式辞が贈られました。



希望に胸を膨らませて

KEIWA Choir (本学聖歌隊) と地元のコラス・グループによって結成されたハレルヤ・コラス、来賓のみならずからのご祝辞、多くの祝電等が披露され、そのすべてが卒業生のこれからの人生へのはなむけとなりました。

それに応えるように、卒業生代表の久志田渉さんが「敬和のキリスト教精神に基づくりベラルアーツ教育によって、自由を獲得する術を学び、留学生や地域の方々との交流によって、幅広い繋がりを深めることができた。卒業後はそれぞれの道を責任を持って進むことで、素敵な生き方をみつけていこうと決意している。」と力強く答辞を述べました。

今年度は、成績最優秀者として蔵品真澄さんと久志田渉さん、卒業表彰者として内山貴啓さんが表彰され、それぞれ副賞が贈られました。そして卒業準備委員長の星山崇明さんから大学に卒業記念品として傘立て(二台)が贈呈されました。

卒業式の後、新潟市内のホテルに会場を移して「卒業謝恩会二〇〇六」が行われました。これは卒業生からお世話になった保護者の方々並びに大学教職員への感謝の気持ちを表すもので、後援会のご協力を得て開催されました。卒業生たちはお世話になった教職員を囲んで楽しかった大学生活を思い起こし、時間を忘れるほど会話がはずむ会となりました。(学生係)



桜の季節にむけて 卒業準備委員長 星山 崇明

卒業準備委員会は、昨年十一月に山岸将史さん、南雄一さん、三田村尚実さん、宮崎宏子さん、阿部元美さん、私の六人で活動を始めました。活動は、卒業アルバムの作成と卒業記念品の選定、卒業謝恩会の企画・開催が中心でした。

アルバムの表紙には、春に咲く桜をイメージした桜色を使い、花の開花を表す英語「Blossom」をタイトルに選びました。また、個人写真とゼミ写真、学生生活やサークルの写真などを集め、枚数を確認した後、私たちの個性を付け加える形で見やすくレイアウトしました。

卒業記念品には、雨の日に濡れた傘を持ち歩いて校舎内を汚すことのないようにと大学の入り口二カ所に傘立てを設置することに決まりました。

卒業謝恩会では、出席者数の確認、開催内容の検討などの準備を進めると共に、当日の司会進行を務めました。大学生活の最後にこのような大変貴重な経験をさせていただいたことに厚くお礼を申し上げます。

卒業にあたって

卒業を目前に控え、改めて大学生活を振り返ってみると、私は恵まれていたのだということを実感します。まわりに顔を知る人が一人もいない。まさにゼロからのスタートだった四年前。抱えていた緊張や不安をすぐに吹き飛ばしてくれたのは、素敵な友人、そして先生方との出会いでした。



英語英米文学科 卒業
千田 結花

新鮮な風の中で

高校までの授業とはまるで違う講義はどれも興味深く、今まで考えたことのなかった様々な角度からものごとを考えられるようになりました。また、ただ席について話を聞いているだけが講義ではないということも知りました。たとえば「文学」の授業では、蛍を見に行ったり、「日本芸能論」では、いくつかの神社を回ったり、お祭りについて調べるために会津まで足を運んだりもしました。中でも特に印象的なのは、「英米ドラマ」の授業で、生の舞台を観劇したこと。自分の目で、耳で、肌で感じた感動は口では言い表せないほど心に響くものがありました。このように考えてみると、私は大学の中で常に新鮮な風を感じながら生活していたように思います。それは、決して私一人でできたはずもなく、周りで支えてくれた家族や友人、先生方のお陰だったと強く感じています。

ありがとうございます。この言葉以外に何が言えるでしょう。充実した四年間の中で、私が出会ったすべての方に感謝いたします。



国際文化学科 卒業
松本 卓文

充実と成長の四年間

ついこの前大学生活を始めたばかりのような気がするのに、もう四年が過ぎてしまいました。時間が早く過ぎたように感じるのは充実しているからだ、とよく言いますが、まさにそのとおりだと思います。自分の学びたい、やりたいと思うことを存分にやり続けることができました。

中でも一番大きかったのがゼミで行った国際環境法の研究です。一つのテーマについて、四年間研究し続けるということは初めての試みでしたが、福王先生と藤本先生のご指導の下、ゼミでの発表の際に寄せられる意見や疑問を取り込むことで、卒業論文として仕上げることができました。

FMラジオサークルでは毎週放送される番組の制作や、敬和祭での生放送など盛り沢山でした。素晴らしい先輩に恵まれ、サークル活動のみならず、就職活動などでもアドバイスをいただくことができました。また、自分が部長になってからは、団体を率いるという責任の重さや、後輩を指導していくことの難しさを痛感しました。研究もサークル活動もただ続けるのではなく、様々な変化を捉えて対応しながら継続したことが、私の視野を広げてくれました。

こうして成長できたのも、多くの人々に支えられて大学生活を送ることができたからです。感謝の心を忘れずに、社会への第一歩を踏み出そうと思います。



国際文化学科 卒業
鄭 文燦

人生の分岐点

私は中国からの留学生としてこの大学に入りました。この四年間は、私にとって人生の分岐点となりました。

私は他人よりも運がよく、二年生で企業への内定が決まりました。一度、大学を辞め、就職を考えたことがあります。私は何度も先生たちのところを訪ね、いろいろなことを聞いて、自分の未来を描いてきました。先生たちは私にとって最もよい相談役でした。そして、今年、無事に四年生を終えて卒業します。先生達のアドバイスや協力のおかげで楽しい四年間を過ごすことができました。大学で出会えた素晴らしい先生たちに、私は深く感謝しています。

大学の授業で一番印象に残ったものは、房先生のゼミでのデイベートでした。事前にとくさんの資料を調べ、その場その場で対応しながら反論していくことが面白かったです。私にとって大学は、社会活動の中で、自分に足りないところを補ってくれる場所でした。わからなかった分野などを学ぶことができ、本当にうれしく思います。

私は再び社会に出ます。しかし、前回とはまったく違う社会です。一つは、変わった自分であり、もう一つは、変わった社会(中国の社会と日本の社会)です。これらをよく利用し、自分の本当の目標——自分の周りにいる人々を幸せにすること——を実現していこうと思います。

先輩から後輩へ受け継いでいく
教員採用に向けた決意



4年生は、この反省会で後輩へ思いを伝えます

去る一月十七日に教職課程反省会を開催しました。これは、教職課程の一年間の活動を締めくくるものです。教員免許状取得を目指している二、三、四年生が一堂に会して、妙高宿泊研修、インターンシップ、教育実習など、この一年間、それぞれの学年ごとにどのような活動を行い、どのような学びがあったのかについて発表しました。

二、三年生は、教育実習や教員採用選考検査について四年生に活発に質問を行い、教員への第一歩である教育実習についてのイメージを膨らませると同時に、採用選考検査に向けてがんばろうという意識を高める機会になりました。四年間の教職課程での学びについて堂々と語る頼もしい四年生の姿を見て、後輩学生たちは、教員採用という夢をかなえる決意を新たにしました。
(教職課程委員会 伊藤)

夢の実現にむけて

努力した分、必ず返ってくる
難関社会福祉士を目指して

来年四月には「共生社会学科」から始める卒業生を輩出します。人間性豊かな福祉人材を育成すること、そしてそれぞれが自分に見合った就職先を見つけることを目標に、国家資格である「社会福祉士」の合格を目指す学生のために、敬和学園大学は総力をあげて支援策を講じています。

四年生の夏休みに実施される集中合宿のほか、専門教員による国家試験科目講座や模擬試験を準備し、学生・教員が一体となった対策に取り組めます。また、試験関連図書や学生同士の情報交換の場として、実習指導室（ボランティアセンター）に国家試験対策情報コーナーを設ける予定です。合格には、学生一人一人のしっかりとした動機づけが必要です。努力した分は、必ず返ってきます。受験者全員合格を目指してがんばります！
(共生社会学科 趙)



1人1人に見あった支援をしていきます

生徒からももらった“元気”



養護文化コミュニケーション学科四年
小野塚 和美

私は、教師になりたいという夢を持って、敬和学園大学に入学しました。入学からすでに三年が過ぎ、今年の七月には教員採用選考検査が待ち構えています。

採用選考検査はとても難しいものなので、大学では検査対策の講座や授業を通して勉強してきました。さらに、指導案やテストのつくり方、教育に関する法律なども勉強しました。その中でも、特に興味を持って楽しく学べたのは、近隣の中学校へのインターンシップと教育実習でした。実際に生徒と接することで、自分の言葉でわかりやすく説明することの難しさや生徒との関係づくりなど、大学の授業だけではわからなかったことに気付かされました。

二年生の夏休みに教職の学生で企画して行った妙高宿泊研修はとてもよい勉強になりましたが、その準備はとても大変なものでした。また、教職の授業の課題をするために徹夜することも多く、教職課程は、つらいこともあります。しかし、実習などで生徒たちと接する機会を持つことで、そういったつらい気持ちもなくなり、いつの間にか元気になってきます。そして、いつも多くのことを学ばせてもらっています。

これから試験に向けて、つらいこともありますが、今度は、教員として生徒と接することができるように、一生懸命がんばってまいります。



共生社会学科四年
金川 朋子

いま、求められる福祉を目指して

私は前期実習に引き続き、後期も知的障害者更生施設にて実習を行ってきました。この施設では知的障害者の方の保護と、各種の活動を通じて自己実現を図り、豊かな生活の場づくりを行うことを目的としており、幅広い年齢の多くの利用者の方が入所されています。

この実習では、利用者の方との関わりをさらに深く、よいコミュニケーションを図ることを目標としました。知的障害者の方の中には、言葉での会話、意思表示が難しい方も多くいらっしゃいます。そのため、相手の考えを理解することが困難な場面も多々ありました。しかし、職員の方からのアドバイスを踏まえて関わり、相手を見つめることで、些細な表情の変化にも気づけるようになり、そこからコミュニケーションが発展するようになりました。普段無口な利用者の方の笑顔を見ることができたことがとてもうれしく印象に残っています。

いま、障害者福祉は変化し続けています。「障害者自立支援法」の実施に伴い、利用者の方の負担が増え、社会と現場でズレが生じてくるなど、実習施設での現実を知る中で、「福祉の役割は何なのか」を改めて考えさせられました。

来年の一月には社会福祉士の国家試験があります。実習で感じたことを忘れずに勉強を進めていきたいと思っています。

活躍の場を求めて自己PR

―七十四社を迎えた学内合同企業説明会―



自分の適性を発見する場となりました

去る二月十六日、本学体育館にて「学内合同企業説明会」を開催し、七十四社、九十五名の採用担当者の方々にご出席いただきました。

これから就職活動をはじめるとリクルートスーツ姿の三年生、約百二十名は、説明会が始まると続々とお目当てのブース目指して体育館に広がって行きました。すでに学外の説明会に参加して余裕のある学生、初めて説明会に参加する緊張気味な学生などさまざまですが、みな真剣な表情で企業の採用担当者のお話を伺っていました。

学生の就職環境も徐々に改善の兆しを見せ、売り手市場との報道も聞かれます。そうした中、参加いただいた採用担当者の方々も、よい人材を見つけようという力こもった説明をしてくださいました。終了予定時刻

を過ぎても、熱心に学生に対応してくださいる企業もいらっしゃいました。ご参加いただいた企業の皆さまには心よりお礼申し上げます。
(就職委員会・就職指導室)

出会いから見つけた新しい自分



共生社会学科四年
田鹿 幸彦

今回の学内合同企業説明会に参加して、新しい自分を発見できました。

昨年十二月に初めて学外の合同企業説明会に参加したときは、緊張して企業の方のお話をうかがうだけで精一杯でした。でも、私にとって四回目となるこの日は、自分の大学が会場であるという安心感もあり、落ち着いて臨むことができました。

訪問したい企業は、事前にチェックしておいたので、関心のある企業のブースを効率よく訪ねることができました。

また、採用担当者の方々の詳細な説明をお聞きすると、会社についての理解がさらに深まったり、自分が抱いていた仕事のイメージが変わったりすることも多々ありました。自分には向いていないと思った企業でも、お話をうかがううちに、自分と合っているのではないかと感じることもありました。これまで気がつかなかった自分の適性の発見です。

これからでもできるだけ多くの説明会に参加し、自分の力を活かせる企業に出会えるよう努力していきます。

人気授業をサーチする

「経済学」



私たちの日常生活や仕事は、物を買ったり売ったり、借りたり貸したりする行為の連続といつてもよいでしょう。経済学とは、これらの行為をいかに効率的にするかを考える学問です。

しかし、これまで効率性ばかりを追求してきた人間の行動は、貧困、所得の不平等、地球環境の破壊など多くの問題をもたらしました。経済学は弱者や地球環境を重視する学問でなければならぬと思い、教育方法を工夫しています。

例えば、グローバル・エコノミーの意味を説明する時には、世界経済は繋がっているの？分裂しているの？「先進国」ってどれくらい「お金持ち」なの？「最貧困国」って何処なの？といったことを学生達に聞いかけながら、事前に自作した経済図などをパソコン、DVD、VTRなどマルチメディア機器を活用しながら見せ、授業を進めています。それによって、教育効果を高めると同時に学生達にグローバル・エコノミー全体像をリアルに意識させました。

これからも私は、弱者・貧困者と地球に優しい経済学の授業を目指していきます。
(国際文化学科 房)

学びの meaning を理解



養護文化「コミュニケーション学科」
劉田 佑二

私は、一年生のときに房先生の経済学の授業を受講したことで、大学での学習のよいスタートができたと思います。

房先生の授業は、これから経済について学んでいきたい人を奮い立たせるような内容でした。特に印象に残っているのは、経済学が私たちの生活に与える影響を、様々な社会問題のビデオを見ながら具体的に学んだことだと思います。そのときには今までの坦々とした空気は一変し、教室内の学生たちの感情は大きく揺れ動いたように思えました。そのビデオには年金がもらえないお年寄りが空き缶を売って生計をたてているといった現実が映し出され、あまりの悲惨さに授業中思わず涙を流す人さえいました。このような矛盾が経済活動によってどのように集積されたのかを分析し、そしてそれを改善するためにはどうしたらよいか、という明確な目的が房先生の授業にはあり、私は大きな魅力を感じました。

経済学の力を現代社会でどのように役立って行くのか、どのように生かすべきなのかという学ぶ上での目的を提供、設定していただいたことは、私のモチベーションを高め、学習をスムーズにしてくれました。そんな理由で、私は英語が専門の英語文化コミュニケーション学科の学生であるにも関わらず、房先生に触発され、経済に興味を持った人たちの一人になりました。

お餅で異文化交流

―新春恒例留学生交流・餅つき大会―

今回で二回目となる「留学生交流・餅つき大会」を一月十二日に開催しました。留学生をはじめ総勢百人余の学生・教職員、外部からのお客様が集まって行われた「日本の食」を通じた交流は大盛況でした。

日本の餅つきを初めて体験する留学生も多く、慣れない様子ながらも力強く杵を打つ留学生に、「ヨイショ、よいしょ！」と会場全体から大きな声援があがりました。あんこ、きな粉、雑煮、百食余のつきたてのお餅は、楽しい会話とともに、アツという間に参加者のお腹に入っていました。

今回、餅米・杵臼・あんこ・きな粉の準備と、餅つきの段取りをしてくださったJ A北越後農協の皆さんと、雑煮を準備していただいた学食の方々に、深く感謝いたします。
(国際交流委員会 田邊)



「よいしょ！」のかけ声にリズムを合わせて

日本のお正月を満喫！



共生社会学科四年
金 海順

私にとって、今回は二回目の餅つき大会でした。多くの留学生と日本の学生、先生方が一緒に集まり、明るい雰囲気の中で餅つきを体験することができました。留学生として日本の文化に触れあえる機会を持つことに、心から感謝の気持ちでいっぱいです。今では、「正月といえば、中国は餃子、日本はお餅でしょう。」というイメージを深く持つようになりました。

はじめは、餅つきは力だけあれば簡単にできるものだと思っていました。しかし、力があっても、「合の手」のタイミングがわからずに、杵で手を打たれそうになる学生もいて、「大丈夫かな」と思いながら、周りの人みんな冷や冷やしながら見ていました。そして、みんなが奮闘した結果、おいしいお餅ができました。

日本のお餅の食べ方も様々あって、餅つき大会に参加するたびに、視野が広がっていく気がします。一回目の餅つき大会では納豆のお餅が出てきて、私をびっくりさせました。きな粉やあんこは前に食べたことがあります。お雑煮は今回が初めてでした。口の中でとろけていくその味は最高でした。食文化っておもしろいですね。

つき立てのお餅を口いっぱいにはおぼりながら、みんなが楽しいひと時を過ごすことができました。これで、今年一年も精一杯がんばりたいと思えました。

韓国語スピーチ大会、W受賞！

外山先生 弁論の部で銀賞
相澤さん 朗読の部で金賞



2006新潟韓国語弁論及び朗読大会にて

韓国語を勉強していますが、つい仕事優先になり、なかなか継続できません。スピーチ大会に出場することで必死に勉強する場に自分を追い込みました。「自分が言いたいことを覚えて人前で発表すると力アップになる」という私の持論を、自分で人体実験した訳です。効果ありますよ！

今は、せっかくなので覚えた韓国語を忘れないように毎日一回言うことにしています。皆さんも英語の勉強がんばってくださいね。

人文学部客員教授 外山 節子

教務課入試係 相澤 純子

大会と名のつくものには出たこともない私が、まだきちんと話せない「韓国語」を大勢の人の前でスピーチするなんて、自分ですら想像もしていなかったことでした。

「この際、審査されることは忘れて楽しむ」そんな気持ちで出場した朗読の部での金賞受賞。不安、驚き、喜び、色々な感情を一度に味わった貴重な体験でした。

今後も、この経験を忘れずに、様々なことに挑戦していきたいです。

学生十教員チーム VS 職員チーム

―日本海カップ綱引選手権大会に挑戦―

去る二月十一日、新発田市で行われた「日本海カップ綱引選手権大会」に、敬和学園大学の学生と教職員で合計四チーム、それぞれ元の自衛隊の方に助っ人として加わっていたいただき、参加してきました。

この大会の審判長を務める高橋満さん(本学教員)の指導の下、参加する学生・教職員は、大会前の数ヶ月、本学体育館を使って練習を重ねてきました。大会当日は、学長も応援にかけつけてくださり、全員がひとつとなって力いっぱい綱を引きました。

また、開会式や休憩時間には、本学のブラスパンド部の演奏やチャリダー部の踊りがあり、大会を盛り上げました。

残念ながら、強豪ぞろいの大会で、本学以外のチームから勝利をあげることはできませんでしたが、最後は、学生・教員チームと職員チームの対戦もあり、大いに盛り上がりました。
(企画・広報係)



力の限り綱を引きました

去り行く先生がたへ

今春は四人の先生がたが敬和学園大学のキャンパスをあとにされた。石川喜一、松崎洋子、岩倉依子、五十嵐海理の諸先生がたである。父・母・娘・息子にもたとえられそうな方がたであったから、まるでキャンパスから一族が抜けたような寂寥の感が残る。二月二十一日の送別会では、まず石川先生がお筆の師匠がた二人を伴っての、本格的な尺八の演奏をしてくださった。二時間後の結びは松崎先生が勝又圭介さん(五期生) 作詞・作曲の「光さす路」を独唱された。このお二人の「始め」と「終わり」を挟んで、去り行く方がたと教職員諸氏の、哀感をこめての感謝と歓喜のことばの交換があった。贈ることばを通して知ったことは、四人の方がたの残された教育上の功績の偉大さであった。それは永く学園から消えない。

(学長 新井)



送別会での一コマ

たぐさんの思い出と学びを胸に



前共生社会学科 教授
石川 喜一

二〇〇〇年四月、私は新発田市市民文化会館の敬和学園大学入学式に参列していただきました。以来七年間、多くの忘れられない素晴らしい思い出を若い学生諸君と素晴らしい教職員の方々からいただきました。

環境問題を主題とするゼミでは、リサイクルに関する素晴らしい卒業論文を書いてくれた学生に感激したり、KIVの第一回国際ボランティアで学生諸君とフイジー島を訪ねて家を建てたり、粟島のゼミ合宿では大きなヒラメの生き造りに舌鼓をうったり、胎内のオリエンテーションの綱引き大会では担当の基礎ゼミの諸君が二年連続で優勝してくれたり、語り尽くせないほどの思い出があります。感謝の念で一杯です。

四十年近くも遺伝子の研究に従事してきた、生命科学の進歩のあまりのスピードに社会が追いついていけない現状に危惧を感じました。また、痛ましい「生命」に関する事件が頻発する今日この頃です。「生命」に関連する事柄をどう考えたいのか、基本的な考え方を学ぶ必要があります。生命倫理学の授業を担当させていただきました、勉強しました。敬和にきて学んだこと、それは「祈ること」と「おそれずに門を叩くこと」です。年齢は関係ありません。

二〇〇七年三月、私も敬和学園大学を卒業させていただきました。ありがとうございました。

たぐさんの「ありがとう」を



前養文花コミュニケーション学科 教授
松崎 洋子

とうとうこの原稿の最終締め切りが来てしまいました。広報委員長として退職される教職員の方々に数々のお別れのことばを書いていたのですが、今度は自分が書くことになりました。一日延ばしにしていたのは、私の性格もありますが、日に日に名残惜しい気持ちが強くなり、この気持ちをどう表せばよいか迷っていたからです。

敬和学園大学と過ごしたこの十六年、思い出することは数限りなくあります。外国語改革を始め、いろいろなプロジェクトに取り組みましたが、私一人では何一つできませんでした。公私ともに多くの同僚、職員の方々に助けられ、なんとかやって来られたのです。忘れられない出会いがありました。教職員の方々とはもちろん、一期生から今の在学生まで、多くの個性豊かな学生たち、社会人学生、留学生、地域の方々。一緒に泣いたり、笑ったり、飲んだり、悩んだり、海外まで出かけたり。こうした出合いは、敬和あってこそのもので、これからも敬和と私を繋いでくれる宝物です。すべての出合いに心から感謝しています。

さて、これからの私です。せっかくだいだいた職を定年までまっとうして辞すことができなかつた分、私なりに考えながら新しい道を行きたいと思っています。敬和の科目等履修生の方々みたいにごごかの大学で勉強しているかもしれませんよ。

退職された教員

ともに歩んできた十五年



前国際文化学科 教授
岩倉 依子

一九八九年十二月の末、冬の新潟にしてはめずらしく晴れわたった日の午後、私は新発田を訪れ、敬和学園大学の建設予定地に立ちました。目の前には木々も建物もなく、ただ広大な黒い地面がひろがっていました。私と敬和との最初の出会いです。

その三年後の三月、私は開学二年目を迎えるようとする敬和に赴任しました。そこにはすでにりっぱな校舎が建ち、四月には二期生も迎え、キャンパスの若い木々は新緑に輝いていました。

あの時から十五年の月日が流れます。その間たくさんの学生たちがここで学び、巣立っていきました。今、私もこの敬和を去るにあたり、ここで出会った学生の皆さん一人一人の顔をなつかしく思い起こしています。皆さんの人生の一時期に、この敬和に関わることができたのは、ほんとうに幸いなことでした。

この十五年間、私は学生の皆さんといっしょに、ヨーロッパ中・近世の社会を歩きながら、その見渡す風景のすそ野をすこしずつ広げ、その意味を掘り起こしてきたような気がします。これからは東京の大学に場所を移して、この散策をさらに続けていきたいと思っています。

赴任当時の木々は見上げるような高さに成長しました。敬和学園大学のさらなる発展を心からお祈りいたします。

風の日の、さよなら



前養文花コミュニケーション学科 講師
五十嵐 海理

そとは、風です。風が窓枠にあたつて鋭い音をたてます。でも、温かい。そんな日です。

二月。春も近くなってきました。敬和では、お役に立ちたいと思いつつもあまりうまくいかなくて、自信を失ったこともありました。それでも、先生方、職員の方々、そして学生諸君の温かい励ましのおかげで、這い上がってこられたように思います。文字どおり、有り難いことでした。

ここ数年は、敬和での仕事をとても楽しんでいました。夜になつても研究室にいたのは、教育・研究のためというよりも、そのほうが落ち着くからでした。ところが、ある大学からのお誘いに感じ入るところがあり、西へ行くことになりました。別な大学に転ずることがよいことかどうか、まだ分かりません。しかし、後戻りはできません。新しい土地で、敬和で学ばせていただいたことを胸に、働いていきたいと思えます。

またお会いすることもあるでしょう。私にとつて、七年間も一緒に過ごしていただいた大切な方々ですから、またきつとご縁があると信じています。

風が唸りながら走る富家の地で、敬和学園大学が温かい存在であり続けることを願っています。ありがとうございました。

故郷のようだった新発田と敬和



前人文学部 契約講師
マシユー・ミフミ

私が敬和学園大学にお世話になったのは三年前のことです。「大きな都市の大学で教えた後で、小さな町の小さな大学で教えるって、どんな感じだろう？」という不安は少しありました。しかし、学生さんや教職員の方々と、町の方々のおかげで、故郷に帰ってきたような気持ちで、新発田に引越して、敬和で働き始めることができました。

少人数クラスを教えるのは本当に楽しかったです。そこでは、多くの学生さんと親しくなることができました。私が特に感謝しているのは、敬和の同僚と職員の方々です。彼らのおかげで私は英語教育の専門家として成長できました。また疲れたりストレスを感じている時には、笑わせ支えてくれました。新発田の町の皆さんからも、町の味や文化、名所を丁寧に紹介していただき、とても感謝しています。

この四月からは、大東文化大学の経営学部で英語を教えます。新しいことに挑戦し、まだ東京に住んでいる古い友達に会えるのは楽しみです。敬和の皆さんにお別れを言うのは、とても悲しいことです。皆さんのいない生活をさびしく感じるでしょう。大学でのたくさんの思い出や、新発田の大好きなレストランや居酒屋、ハイキングに出かけた山道のことなどをなつかしく思い出します。このすばらしい三年間を本当にありがとうございました。

〈2007年度オープン・カレッジ〉

敬和学園大学クリスマス・チャリティ講演会（新発田市生涯学習センター）
 12月 8日（土） 「生と死とユーモア」 アルフォンス・デーケン 上智大学名誉教授
 ※お問合せ 敬和学園大学総務課（Tel 0254-26-3625、e-mail kcop@keiwa-c.ac.jp）

敬和学園大学 「英米絵本のたのしみ」
 9月29日（土）、30日（日） 英米絵本のたのしみ（その1） 吉田 新一 児童文学研究者
 10月27日（土）、28日（日） 英米絵本のたのしみ（その2） 吉田 新一 児童文学研究者
 ※お問合せ 敬和学園大学総務課（Tel 0254-26-3625、e-mail kcop@keiwa-c.ac.jp）

敬和キッズ・カレッジ（まちの駅よろず 新発田学研究センター）
 8月 4日（土）、25日（土） 親子写真教室—親子でつくる思い出アルバム 吉原 悠博 フォトアーティスト
 ※お問合せ 敬和学園大学総務課（Tel 0254-26-3625、e-mail kcop@keiwa-c.ac.jp）

新発田市 「いのちと環境を見つめる」（新発田市生涯学習センター）
 6月 7日（木） ソロー『森の生活』における自然と文明 北 垣 宗 治 前 学 長 授
 6月14日（木） 芭蕉・いのち・哲学 延 行 教 准 授
 6月21日（木） 『いのち』への感受性—自然撮影の現場から 森 本 二 太 郎 写 真 家
 6月28日（木） 水俣病と社会的損失—「いまなぜみなまた」か 坂 東 克 彦 弁 護 士
 7月 5日（木） 中野孝次文学にみるいのち—日英の詩を交えて 北 嶋 藤 郷 教 授

※お問合せ 敬和学園大学総務課（Tel 0254-26-3625、e-mail kcop@keiwa-c.ac.jp）

新潟市北区 「いのちと環境を見つめる」（豊栄地区ふれあいセンター）
 6月12日（火） 恐ろしい森からやさしい森へ 新 井 明 学 長 授
 6月19日（火） アメリカの環境政策—日本との比較 前 嶋 和 弘 准 授
 6月26日（火） 江戸文化に見る自然との調和 趙 晤 准 授
 ※お問合せ 新潟市豊栄地区公民館（Tel 025-387-2014）

聖籠町 「国際社会とわたしたち」（聖籠町町民会館）
 10月16日（火） 自己発見のための異文化理解 中 村 義 実 准 授 師
 10月23日（火） 日本の国際化と人権 藤 本 晃 信 講 准 授
 10月30日（火） インターネット時代のコミュニケーション 一 戸 信 哉 准 授
 ※お問合せ 聖籠町町民会館（Tel 0254-27-2121）

三条市 「ファンタジー」—大人が読む児童文学—（三条市中央公民館）
 10月18日（木） 『指輪物語』—二つの英雄譚 杉 村 使 乃 准 授
 10月25日（木） 『ゲド戦記』—自分自身への旅 松 崎 洋 子 前 授
 11月 1日（木） 『ナルニア国物語』—キリスト教的な世界観を中心に 金 山 愛 子 准 授
 ※お問合せ 三条市中央公民館（Tel 0256-32-4811）

村上市 「ファンタジー」—大人が読む児童文学—（岩船広域教育情報センター）
 7月28日（土） 『はてしない物語』—読むという行為を考える 桑 原 ヒサ子 教 授
 ※お問合せ 岩船広域図書館（Tel 0254-53-7511）

樹木の成長から垣間見る、敬和学園大学の十六年

キャンパス内の植栽はほとんどがいたいたものでした。

今から約十九年前、敬和学園大学の校舎の設計図が完成した時点では、すばらしい植栽を含む外構工事を計画していました。しかし翌年の一九八九年三月に契約した校舎新築工事には、外構工事はほとんど含まれていませんでした。外構工事の費用が校舎建設費に廻ってしまったためです。

従って、開学時の舗装は正門の少し先までその奥は砂利敷き、植栽は図書館前の数本という状態で、雪が降ると駐車場から校舎まではゴム長靴を必要とし、雨が降ると校舎の中まで泥が浸入する状態でした。

その後地元の方々や在学生の家族が、少しずつ樹木を寄付してくださいました。しかし、いただいたものを植えるお金がありませんでした。そこで、「作業日」には事



桜の木の下でお花見



1本の木に紅白の花が咲くハナモモ

務職員はゴム長靴を履き、軍手をはめ、スコップで穴を掘り、木を植え、雑草取りをしました。そんな一年目夏の「作業日」を知っている人はすでに少なくなっています。駐車場の舗装は数年後のことで、ようやく現在のキャンパスになりました。

開学時には体育担当の教員から「日陰が欲しい」と言われたものでしたが、今では、少し間引きをしなければならぬほどに緑が繁るキャンパスになってきています。雪が消えるとハナモモが咲き、入学式の間には桜の木の下でお花見ができ、秋になればイチジクやブルーンの収穫ができます。空に枝を広げる樹木を見上げると、この樹木が成長したほどに、私達は成長したのだろうか、と思います。

「あつ」という間の十六年でした。

（総務課長 長澤）

今年も地域の生涯学習を応援

学生向けの授業とは別に、地域のみなまの生涯学習の一助となるよう、今年も敬和学園大学や近隣の市町を会場にして、様々なプログラムを企画・実施します。

今年からは、小学生向けのプログラムとして敬和キッズ・カレッジがはじまります。また、春講座では、「いのちと環境を見つめる」をテーマに、皆さまと一緒に環境

1 エクステンション・プログラムのご案内

のことを考えていきます。シリーズとなっている児童文学の講座も四回目を迎え、今回は、英米絵本の世界を愉しんでいきます。それぞれの日程やお問合せ先は次のとおりです。ご夫婦でご参加の場合には、参加費が割引となる講座もございます。たくさんの方々からのご参加をお待ちしています。

（広報委員会）

おいしい新発田を体感

—小泉武夫先生を迎えた記念講演会—

去る三月二十一日、二百二十名の地域の皆さまをお迎えし、新発田市生涯学習センターにて、まちの駅よろず新発田学研究センター開所記念講演会「食を通じて新発田文化を体感」を開催いたしました。

第一部では醸造学の第一人者である東京農業大学教授の小泉武夫先生より「食の文化と地域の活性化」と題し、新発田市の活性化にもつながる、熱のこもったお話をいただきました。続いて行われた第二部では、「城下町しばたの食」をテーマに、市島酒造会長市島園子氏、NPO法人「赤とんぼ」認定業務主任佐瀬鉄栄氏、本学マーケティング講師によるデイスカッションを行いました。また講演会終了後には、特別企画である雑煮の試食会を開催し、参加者の皆さまに新発田の食を体感していただくことができました。（新発田学研究センター）



おいしい雑煮を「体感」

春からはじめる生涯学習

—二〇〇七年度科目等履修生・研究生の募集—

科目等履修生制度とは、敬和学園大学の授業を、社会人や主婦の方などにも、幅広く学んでいただけるように設けられた制度です。ご自分の興味のある、学びたい科目を選択し、受講することができます。学生向けに開講しているほとんどの科目を受講することができます。仕事をお持ちの方も受講しやすいように、午後七時から開講している科目や新潟駅前で開講する科目も用意しております。

●科目等履修生の募集

対象 高等学校以上を卒業した方
 又はこれと同等以上の学力があるものと認められる方

授業料 一単位につき、一万円

出願期間（前期）四月十一日～二十七日
 （後期）九月二十五日～十月十二日

※ 受講できる科目や研究生制度等につきましては、お問い合わせください。

いずれもお問合せ、お申込みは、

敬和学園大学教務課教務係まで
 TEL 〇二五四—二六一—五一一四
 e-mail kyounu@keiwa-c.ac.jp

キャンパス日誌

1月

- 4日 一般入試(A日程)出願(~23日)、
一般入試(B日程)、外国人留学生入試(1期)出願(~30日)、
センター試験利用入試(1期)出願(~2月2日)
- 5日 仕事始め
- 6日 講義再開
- 10日 卒業論文提出締切日
教授会
- 11日 高齢者との昼食会(於:新発田学研究センター、写真)
- 12日 チャペル・アッセンブリ・アワー②
説教 宇田川潔 事務局長 「天の梯子」
最終講義 松崎洋子 教授
「好きなことを続けていると」
最終講義 石川喜一 教授(写真)
「ポール、黄君、そして柳澤桂子さん」
留学生交流・餅つき大会
- 16日 補講日(~18、22日)
- 17日 教職課程反省会
- 18日 高齢者との昼食会(於:新発田学研究センター)
- 19日 チャペル・アッセンブリ・アワー③
説教 新井明 学長 「T先生のこと」
最終講義 岩倉依子 教授(写真)
「ルターとヴァルトブルク」
最終講義 五十嵐海理 講師
「細部に宿る意味—un—の意味解釈」
後期エッセイ・コンテスト授賞式(写真)
ケリー・ニューエル奨学金授与式
学生団体年度内表彰式
資格取得奨励奨学金授与式
- 20日 後期講義終了
- 23日 後期末試験(~2月2日)
- 25日 理事会
高齢者との昼食会(於:新発田学研究センター)
- 28日 一般入試(A日程)
- 31日 教授会
中条高校イングリッシュ・セミナー
(65名)(写真)

2月

- 1日 高齢者との昼食会(於:新発田学研究センター)
- 2日 一般入試(A日程)合格発表
社会福祉現場実習報告会(写真)
- 4日 春期休暇(~3月31日)
一般入試(B日程)、外国人留学生入試(1期)
- 5日 後期集中講義(~8日)
- 7日 教授会
- 9日 一般入試(B日程)、外国人留学生(1期)、
センター試験利用入試(1期)合格発表
- 12日 一般入試(C日程)、外国人留学生入試(2期)、
編入学試験(3期)出願(~3月8日)
センター試験利用入試(2期)出願(~27日)
- 14日 後期末追試験(~16日)
- 16日 学内合同企業説明会(74社参加)
- 21日 教授会
- 25日 KIVサークル 国際ボランティア inタイ(~3月7日)(写真)
- 28日 再試験

3月

- 1日 図書館蔵書点検(~16日)
センター試験利用入試(3期)出願(~22日)
- 7日 教授会
- 8日 センター試験利用入試(2期)合格発表
- 13日 一般入試(C日程)、外国人留学生入試(2期)、
編入学試験(3期)
- 14日 教授会
阿賀黎明中学校模擬講義(1・2年生75名)(~15日)
- 15日 一般入試(C日程)、外国人留学生(2期)、
編入学試験(3期)合格発表
- 20日 第13回卒業式(聖籠町町民会館)
卒業謝恩会(ホテル新瀧)
- 21日 新発田学研究センター開所記念講演会
基調講演 小泉武夫 東京農業大学教授
「食を通じて新発田文化を体感」(写真)
(新発田市生涯学習センター、220名)
- 24日 センター試験利用入試(3期)合格発表
- 29日 理事会
- 31日 学年終わり



同窓会リレー・エッセイ②
一九九五年度卒業
坂爪 直樹

つながって活かされる、人と人

気が付けば卒業してから十二年という月日が経っていました。当時、二期生だった私たちは、上は一期生だけだったため、伝統やハードな上下関係などはなく、自由で、これから自分たちで創り上げていこうというエネルギーに満ち溢れていました。

出会いと笑顔、心からの拍手をもらったふれあいバラエティー、おおいに盛り上がり、はしゃぎにはしゃいだ敬和祭、歌うことで体と心が暖まったクリスマス・キャロリング、きつくもあり楽しさいっぱいのラグビー部、そして何とも語り尽くせないたくさん仲間たち、先輩や後輩と過ごした日々。あつという間の四年間でしたが、敬和学園大学での出会いと経験、そして大学で学んだことのすべてが、今の私に活かされており、今でも私の宝となっています。

卒業後はなんとなく旅に出ました。中東やヨーロッパ、南米などバックパックを担ぎ、様々な文化や風習に触れ、ゆかいな人々と共に生活しているうちに、世界というのは意外に身近なものだと感じました。現在、私は自動車関係の会社を立ち上げ、大切な家族や仲間と理解あるお客様たちに囲まれ、地元新潟にこだわりながらも日々、出会いと勉強を繰り返しています。

敬和学園大学で学んだこと、それは、人と人とのつながりがありました。

寄付者ご芳名

- 一般 肥田野 秀司
- 河上 正義
- 松井 愛美
- 村上 毅
- 室崎 陽子
- 鷹澤 昭一・信子
- 田代 美津枝
- 日本基督教団東中通教会
- 日本基督教団東中通教会 婦人会
- 日本基督教団見附教会
- 日本基督教団新津教会
- 高木書店
- オレンジ会 2
- 敬和学園大学後援会 4
- 新井 明 3
- 山田 耕太
- 今井 正仁
- 滝川 基
- 一九九二組 坂爪 直樹
- 一九九三組 丸山 仁史
- 一九九八組 呉 賢欄
- 一九九九組 五十嵐 亜希
- 二〇〇〇組 田中 正範
- 二〇〇二組 三沢 大介
- 風間 裕

本学にお寄せくださった皆さまの支援・ご厚意に心より感謝申し上げます。

学事予告

- 四月 入学式
- 四月 一年外国語ガイダンス
- 四月 四年ガイダンス
- 四月 プレイスメント・テスト
- 四月 健康診断(六日まで)
- 五月 二・三年ガイダンス
- 五月 一年ガイダンス
- 五月 新入生歓迎公開学術講演会
- 五月 履修相談日
- 五月 履修登録期間(十七日まで)
- 五月 学費前納入最終日(二・四年)
- 五月 新入生オリエンテーション(二十日まで)
- 五月 植樹式
- 五月 創立記念日振替休日
- 五月 JCLP/ERAC(六月十六日まで)
- 五月 スポーツ大会
- 五月 社会福祉現場実習事前実習2
- 五月 新発田市オープン・カレッジ(毎週木曜日、七月五日まで)
- 五月 社会福祉現場実習1(二十三日まで)
- 五月 新潟市北区オープン・カレッジ(毎週火曜日、二十六日まで)
- 五月 留学生の集い
- 五月 オープンキャンパス
- 五月 創立記念日
- 五月 高校教員対象進学説明会
- 五月 JCLP(七月二十一日まで)
- 五月 敬和ボランティア・デイ